

教育講演

今こそ 世界平和を —加納莞薔の想いをつなぐ—

KANO Kayoko

加納 佳世子

安来市加納美術館 名誉館長



このたびは、講演の機会を賜り、心より御礼申し上げます。

「今こそ 世界平和を—加納莞薔の想いをつなぐ—」との演題でお話をさせていただきました。今回の学会の会長様よりお話をいただきましたことは、有り難く光栄なことでした。全国から多くの関係の先生方が集まられるという会でお話をさせていただくということは、私が願っている平和への思いが広がっていくよい機会となりました。

今、世界の中では、争いが起きておりなかなか解決に至りません。そのような時に平和を築くための何かが考えられればということで私のお話が皆様に届けばという思いでお話をさせていただきました。

今回の講演では、私の父・加納莞薔が生涯をかけて追い求めた「平和を希求する心」についてお話いたしました。

莞薔は従軍画家として中国で戦争を体験しました。戦後、郷里に帰りまして、その頃、フィリピンから帰国した古瀬海軍少将との出会いから戦争はなんであったかを考えるようになりました。古瀬氏は「戦争はあやまりであった」と言い、また「未来ある青年を死に追いやった私の罪は万死に値する」とも。彼は、特攻隊の司令官でもあったのです。

その後、彼は、フィリピンの軍事法廷に立ち、日本軍のひとりとして死刑を求めたのです。

莞薔が、平和について深く考えるようになったのは、彼が死刑になれば平和がおとずれるだろうかと思ったところからでした。

莞薔は、フィリピンの大統領に日本人戦犯に死刑執行をしないで日本に帰してほしいと書簡を送り続けるのです。戦争犯罪人を死刑にして平和が来るのだろうか、むしろ戦犯こそが平和を築く種子となるのではないかと。莞薔は大統領の「赦し

難きを赦す」ことこそ平和への道だと訴えていきました。

莞薔の書簡は、大統領だけではなくフィリピンの要人、またマッカーサー、キリスト教関係、ローマ法王…など等。10年にわたる往復書簡は300通を超えています。

そして、ついに1953年のフィリピン大統領エルビディオ・キリノによる日本人戦犯赦免の決断。

キリノ大統領自身、戦争で家族を失った深い悲しみを抱えておりその赦免は決して容易な判断ではありませんでした。むしろ政治的にも個人的にも大きな葛藤を伴う苦渋の決断であったといえるでしょう。しかし彼もまた憎しみの連鎖を断ち切り未来の平和を築くためには、「赦し」こそが不可欠であると考え、その信念に基づいて行動したのです。

莞薔は、キリノ大統領の決断に深い共感をよせ、その思想を次世代へどうつなぐかを考えその後、「世界児童憲章」を主張していきました。

莞薔が生涯を通じて説いた「憎しみを愛に変える」という思想はキリノのゆるしの精神と響きあい、戦後の日比関係が良好な友好関係を築いている背景となっていると言えるでしょう。

本年は日本とフィリピン国交回復70年という年に当たります。改めて歴史的事実の中に大きな意味があり学ぶことがあると思います。

また、昨年、莞薔の平和思想を表す往復書簡集は安来市有形文化財として指定されたことをここに付け加えさせていただきます。安来市は平和教育に生かすように、そして安来市はもとよりキリノと莞薔の平和思想を世界に向け、発信すべし…と。

今回の講演が皆様の心に小さな灯火となり日々の営みの中で平和をはぐくむ力となれば幸いです。主催者の皆さま、そして聞いて下さったすべての方々にあらためて深く感謝申し上げます。